

様式 6

平成16年度共同利用実施報告書(研究実績報告書)

1. 研究種目名 特定共同研究(A) 2. 課題番号 2004-A-18
3. 研究課題(集会)名 和文：全国地震観測データ等を用いた地殻活動モニタリング手法の高度化
英文：Improvement of technique for monitoring crustal activity by using nation-wide Japanese seismic waveform data
4. 研究期間 平成16年 4月 1日 ~ 平成17年 3月31日
5. 研究場所 地震研究所
6. 研究代表者所属・氏名 防災科学技術研究所・笠原敬司
(地震研究所担当教員名) 卜部 卓
7. 共同研究者・参加者名(別紙可)
別紙
8. 研究実績報告(成果)(別紙にて約1,000字 A4版(縦長)横書)(別紙に作成)
別紙
10. 成果公表の方法(投稿予定の論文タイトル、雑誌名、学会講演、談話会、広報等)
研究集会「地震観測データ流通とモニタリング手法の高度化」を2005年3月4日地震研究所にて公開で開催した。

7. 共同研究者・参加者名

研究集会参加者(2005.3.4)

| 氏名 | 所属 |
|-------|--------|
| 鷹野 澄 | 東大地震研 |
| 松島 健 | 九大 |
| 植平 賢司 | 九大 |
| 中川 茂樹 | 防災科研 |
| 青木 重樹 | 気象研 |
| 和田 博夫 | 京大防災研 |
| 卜部 卓 | 東大地震研 |
| 小原 一成 | 防災科研 |
| 束田 進也 | 気象庁 |
| 大見 士朗 | 京大防災研 |
| 鎌谷 紀子 | 気象庁 |
| 勝間田明男 | 気象大学校 |
| 山本 俊六 | 防災科研 |
| 堀内 茂木 | 防災科研 |
| 辰巳 賢一 | 京大防災研 |
| 一柳 昌義 | 北大 |
| 渡辺 俊樹 | 名大 |
| 鶴岡 弘 | 東大地震研 |
| 三浦 哲 | 東北大 |
| 堀 直人 | 国土館大 |
| 小林 励司 | 東大地震研 |
| 中村 雅基 | 気象研 |
| 山崎 文人 | 名大 |
| 生田 領野 | 名大 |
| 木村 昌三 | 高知大 |
| 松澤 暢 | 東北大・理 |
| 伊藤 潔 | 京大防災研 |
| 勝俣 啓 | 北大・理 |
| 小菅 正裕 | 弘前大・理工 |
| 内田 直希 | 東北大・理 |
| 笠原 敬司 | 防災科研 |
| 山岡 耕春 | 東大地震研 |
| 中村 浩二 | 気象庁 |
| 加藤 尚之 | 東大地震研 |

| 氏名 | 所属 |
|-------|-------|
| 八木原 寛 | 鹿児島大 |
| 笠原 稔 | 北大 |
| 大竹 和生 | 鉄道総研 |
| 塚越 芳樹 | 東大地震研 |
| 金沢 敏彦 | 東大地震研 |
| 平田 直 | 東大地震研 |

8 . 研究実績報告（成果）

「地震観測データ流通と地殻活動モニタリング手法の高度化」をテーマに、2005年3月4日に地震研究所第2会議室にて研究集会を開催した。研究代表者笠原（防災科研）の挨拶の後、まず地震データのリアルタイム処理システム関連の話題として、束田（気象庁）が「緊急地震速報に関する最近の話題」と題して気象庁緊急地震速報システムの現状を紹介し、続いて堀内他（防災科研）が「緊急地震速報における震度マグニチュードの提案とその効用」の講演を行った。次に地震活動のモニタリング手法やシステムに関する講演に移った。まず小原（防災科研）が「低周波地震・微動活動について」の講演を行い、関連して須田（広島大）が「低周波微動の自動モニタリング」を、勝間田（気象大）他が「深部定収は微動の検知と震源決定」を紹介した。その後さまざまな話題に入り、鶴岡（地震研）が「GriD MTによる長周期波動場のモニタリング」、鷹野（地震研）他が「大中規模地震データによる応力蓄積解放モデル」、生田（名大）が「ACROSSによる浅部地殻のモニタリング」、内田（東北大）他が「小繰り返し地震によるプレート境界の準静的すべりのモニタリング」、勝俣（北大）が「ZMAPによる長期地震活動度のモニタリング」、田所が「地震学的手法を用いた構造の時間変化の検出」、中川（防災科研）他が「Hi-netを活用した地下構造の可視化について」と、多様なモニタリング手法の紹介が行われた。ここまで研究発表は終了し、次にデータ流通システムの今後についての情報交換と打ち合わせに入った。まず小原（防災科研）が、「Hi-netのFRからIP-VPNへの移行について」と題してHi-netのデータ伝送システムをこれまでのフレームリレー網からIP-VPN（EarthLan）に移行させる計画を紹介し、平田（地震研）他が「衛星システムの今後と地上への移行について」と題して2年半後の衛星帯域契約変更に向けての現状と考え方を紹介した。その後、地上回線への移行の取り組みとして各大学のフレッツ回線利用状況の紹介に入り、三浦（東北大）、植平（九大）、大見（京大）、卜部（地震研）がそれぞれの大学における現状と今後の計画を紹介した。この研究集会を通して、リアルタイム、準リアルタイム、非リアルタイムのさまざまな地殻活動モニタリング手法が紹介され、それらの現状と課題が議論された。